

# 優秀賞 水の週間実行委員会会長賞

## 一滴の水

茨城県 土浦日本大学中等教育学校

一年 廣瀬 裕貴

「うまいっ！」

僕は小学生の頃、休み時間に友達とサッカーをした後、水道の蛇口をひねり、ガブガブと水を飲んだ。この時の水は、格別においしく感じられた。好きな時に、好きなだけ水が飲める幸せを、僕は誰よりも知っている。

小さい頃、僕は病気の為に、厳しく水分制限を強いられていた。一個二ミリリットルの氷を作り、それを一日二十五個。わずか、五十ミリリットルしか口にすることができなかった。人間の身体は、六十パーセントが水と言われ、平均水分摂取量の約二十分の一しか口にしていなかった事になる。点滴で水分を補っていたとは言え、僕はいつも喉がカラカラだった。幼いながらに、一滴の水も無駄にしないように、必死だった。それだけに、今自由になんか水を飲む事が、どれほどありがたい事か、感謝せずにはいられない。

僕達の生活に、水はかせない。歯みがきに始まり、食事をするにも、お風呂、トイレ何をするにも、水がなければはじまらない。地震の多い日本では、時として大変な被害に襲われる。ライフラインは寸断され、たちまち平和な生活は、苦境へと変わってしまう。電気やガスももちろんだが、一番困るのはやはり水だ。何より、人間の生命を保つ為にはかせないものだからだ。

この、なくてはならない水が、突然その姿を変え、僕達に襲いかかる事もある。僕が住む龍ヶ崎では、度々小貝川の決壊による水害にみまわれた歴史がある。多くの家が浸水し大変な被害だったと、祖父が話してくれた。水の威力が大変なものだと、テレビの実験番組で見た事がある。わずかな水でも、水圧によってドアを開く事は困難となり、迫りくる水に、生活のすべてが流されてしまう事があるとは、とても想像ができない。ニュースで見た津波の映像が、目の前で起きたらと考えるだけで、僕は足がすくんでしまう。

僕達の生活を守る生命の水が、僕達の生命を奪う脅威の水にもなってしまう。この両極端な二面を持つ神秘なる水と、僕達はどうか向き合っていくべきか、考えなければならぬ。僕の住む地域には水田が広がり、春になると小さな苗が水の中で風にゆれている。小学生の時に、バケツで苗を育てた事がある。苗の水を吸い上げるエネルギーに、僕はとても驚いた。そして、夏には日照りの水不足を恐れ、秋には台風や大雨による洪水に怯え、黄色い稲穂は、美味しい米となつて僕達の元に届けられる。この、米作りを経験して、僕は美しい水を守る為に何ができるのか、何をしなければならぬのかを考えさせられた。歯みがきの水やシャワーを出しっぱなしにしないとか、シャンプーや石けんは必要以上に多く使わない事ぐらいしか思いつかなかった。それでも、何か一歩始める事は、僕の意識を変えた。今では、食器洗いの洗剤の使用量も減ったし、食器の油污れは拭き取ってから洗っている。風呂の残り湯や米のとぎ汁を水まきや掃除に使うなど、僕にできる事が少しずつ増えてきた。水は、有限資源だ。一滴の水を大切に守る事は、僕達一人一人の生命を守る事にも繋がる。清らかな水のあるところには、さまざまな植物が育ち、人間はその恵を受けて、生きていくのだから。そして、その水を大切に思う気持ちがある。時に脅威へと変貌する水の被害からも、僕達を守ってくれるような気がする。

小さい頃、一滴の水のありがたさを感じたあの気持ちも、今も忘れる事はない。一滴の水は、たくさんの恵を与え、僕達の生命を守ってくれる力を持つ、奇跡の水だ。

「うまい！」

この作文を、一気に書いた僕の喉はカラカラだ。冷えた一杯の水は、また僕に大きなパワーを与えてくれた。